

<エッセイ>タゴールの詩集『ギタンジャリ』と日本

著者	キニ ギータ・A
雑誌名	日文研
巻	57
ページ	48-54
発行年	2016-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006498

<エッセイ>タゴールの詩集『ギタンジャリ』と日本

著者	キニ ギータ・A
雑誌名	日文研
巻	57
ページ	48-54
発行年	2016-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006498

タゴールの詩集『ギタンジャリ』と日本

ギータ・A・キニ

はじめに

タゴールはインドでは「Viswakabi (世界の詩人)」として知られています。詩集『ギタンジャリ』により、一九一三年アジアで初めてノーベル文学賞を受賞し、世界との絆を結ぶことになりました。そんなタゴールの初訪日百周年記念の機会に『ギタンジャリ』が日本の人々にとどのような影響を及ぼしたかについて検討してみたいと思います。

ところで、念のため申し上げておきますが、詩集『ギタンジャリ』はまずタゴールの母国語ベンガル語で書かれ、出版されました。一方、タゴールのノーベル文学賞受賞対象作品となった英語版『ギタンジャリ』は、実はそのベンガル語原典版からの忠実な逐語訳ではありません。この英語版は、勿論原典ベンガル語版の主旨に添いながらも、タゴール自身がさらに自由に発想を膨らませて翻訳作品化した、もう一つの『ギタンジャリ』とでもいうべき性格を持つものになったものであることを、心にお留めいただければと思います。

論を進めるにあたり、ここでは次の書物を参考にしました。

1) 『タゴール詩集 新月・ギタンジャリ』高良とみ訳 アポロン社 一九六四年

2) 『タゴール詩集』山室静編 世界の詩三九 彌生書房 一九六六年初版発行

(今回のエッセイでは、一九九一年一九版発行のものを参考。)

3) 『タゴール詩集 ギーターンジャリ』渡辺照宏訳 岩波文庫 一九七七年第一刷発行
(右に同じく、一九八八年第八刷発行のものを参考。)

4) 『ギタンジャリ』森本達雄訳註 第三文明社 レグルス文庫(二〇九) 一九九四年

5) 『タゴール著作集』第三文明社 第一巻 一九八一年
(『タゴール著作集』には右記の四人を含め沢山の方々が参加貢献している。)

『ギタンジャリ』の翻訳に携わった翻訳者略歴

高良とみ…一九一六年タゴール初訪日時、日本女子大学の学生としてタゴールに接する機会を得る。その後のタゴール訪日時には通訳として参加。一九三五年にシャンティニケトン訪問。元日本女子大教授。元参議院議員。元日印タゴール協会長。

山室 静…北欧文学研究者。詩人。評論家。青年時代にタゴールを知り、晩年まで翻訳に携わる。

渡辺照宏…元九州大学教授、インド哲学、仏教学者。ベンガル語、サンスクリット語、ドイツ語など多くの言語に習熟。

森本達雄…元名城大学教授。元ピッツィョ・パロティ大学客員教授(一九六四～一九六七)。大
学時代日本語を教えていた米国宣教師から『ギタンジャリ』を紹介される。

翻訳者の熱意と翻訳出版にまつわるエピソード

興味深いことに、高良とみの『タゴール詩集 新月・ギタンジャリ』はインド元首相ジャヤハルラール・ネルーの『インドの発見』などの著作の日本語版による版權料によって一九六四年に出版されました。ネルー首相のタゴールに関する見解の日本語訳がこの本の序文に載せられています。

山室静の翻訳は三回にわたって出版されました。三番目の彌生書房版の序文に山室静は前の二つの出版について次のように述べています。「最初（河出書房版）は昭和十八年で、まだ戦争中のことだった。大東亜共栄圏などというお体裁のいいかけ声の陰に、いかにも非人道的な侵略戦争がおし進められていくのにいささかでも抵抗するつもりで、私は同じアジアの生んだこの愛と人道の詩人の仕事を、あらためて紹介することにしたのであった。河出書房にいたM君が、当時はほとんど忘れ去られ無視されていたこの敵性国詩人の詩集をあえて引き受けて、出版の運びにまで持ち込んでくれたが、一二の詩編は、当時のきびしい検閲のためにカットしなければならなかったのを思い出す。」（山室・一六四）更に加えて「前の二つの詩集から代表的な作を大半拾うと共に、これまで未紹介だった詩をできるだけ多く収録することにした。（中略）ここに、とかく従来は単に甘美な抒情詩人ととられがちだったタゴールの、熱烈な愛国者ないしヒューマニストとしての面を伺わせる詩篇を、わりと数多く収めえたことは、きっと読者にも喜んでもらえるのではないかと思う。」（山室・一六四―五）この詩集一五〇篇中一八篇は『ギタンジャリ』の詩集から厳選されています。

一九五七年に角川書店により出版された二番目の翻訳について山室静は次のように述べてい

ます。「前者の大半にその後手にいれた「白鳥」などの詩集や、タゴール没後に出た「選詩集」からの数編を補い、詩人が最初に日本を訪れた時に東京帝大でした講演「日本へのメッセージ」を添えたものであった。これは幸いに歓迎されて、今でも屢々版を重ねている。」(山室一六四)

一九八一年日本で出版されたタゴール著作集全一二巻の第一巻に森本達雄の翻訳が載っています。この翻訳は主にマクミラン版により出版された英語版をもとにしたものです。その同訳作品を取めたレグルス文庫の序文に、森本達雄は初めて『ギタンジャリ』に出会い、これを読んだ時の感情を次のように述べています。「そして、その第一歌の最初の一行に、誇張ではなく、決定的な衝撃を受けたのである。『おんみはわたしを限りないものになしたもうた―それがおんみの喜びなのです。』読みながら、稲妻にも似た不思議な感動の戦慄が、一瞬私の体内をつらぬき、身ぶるいしたことは、いまでも私は鮮明に記憶している。(中略)私は一編一編原文をノートに写しとっては、自分なりの拙い訳文をかきこんでいった。」(森本・五)

森本達雄はまた、このようにも語っています。「この間私は、いくたびか詩集の翻訳をこころみた。それはけっして、出版目的としたものではなく(中略)翻訳作業をとおして、それぞれの作品にたいする自分なりの理解を深め、共感をたしかめるためであった。そんな翻訳の思い出でとりわけ懐かしいのは一九六四年から三年間、詩人がその後半生を過ごしたサンティネクトンに滞在できたときのそれである。」(森本・六) 森本達雄のシャンティニケトン滞在はタゴールの思想、そしてベンガルの文化を彼の翻訳を通して日本の読者に正しく伝えるのに非常に活躍しました。

今回取り上げた四つの翻訳の中で渡辺照宏の訳だけは『ギタンジャリ』のベンガル語版から直接翻訳されたものです。渡辺照宏は『ギタンジャリ』の英語版も日本語に訳し、ベンガル語による韻文訳とともにこの本に収めています。

タゴールの詩の翻訳にあたって渡辺照宏はどのような方法を取ったかについて次のように語っています。『ギーターンジャリ』はなによりもまず吟誦し、唄うべきものです。原詩の形式をできるだけ保存し、行数はもちろん、各行の長さもだいたい元の通りにし、原詩曲のまま日本語でも唄えるように、と言うことになると、私としては文語体をえらぶ他はありませんでした。古雅であると同時に大衆にもよくわかる言葉といえ、日本語では何に相当するでしょうか。私のは一つの試みに過ぎません。原詩の風格をそのまま日本の口語韻文に移す人がいずれ現れることを期待しながら、この拙い文語訳を世に送ります。」(渡辺…三八七)

さらに彼はこのように語っています。「詩の訳にあたって一番肝心な意味の取り方、つまり語学的理解という点では私の全力を尽くしたという以外には何も言えません。英訳のあるものでも細かい点では頼りにならず、結局のところ、主として三種のベンガル言語辞典に依りましたが、『ギーターンジャリ』の時期の作品の用例はどの辞典にもほとんどでないのです、私自身の作製した用例カードによって帰納的に概念規定を確認した場合もかなりあります。大意や、特に問題になる個処についてはインドの友人に質問して説明してもらいました。」(渡辺…三八七―八)

翻訳に見られる尊崇の念―高良とみの場合

高良とみはタゴール詩集のあとがきにタゴールのことをグルデブと敬称で呼んで、当時起き

ていた世界大戦を批判するタゴールの考えを紹介しています。「平和を愛するあなたはそれに心を痛めて悲しんで欧州にもアジアにも幾度も幾度も武器の無益を叫んで旅して来られました。欧州でもアメリカでもわたくしは平和と真理の途を説いて旅するあなたにお逢いしました。中国を訪ねた帰りにあなたはふたたび日本に来られました。長崎から博多へ高島から六甲山へとわたくしは詩聖一行の道案内をし講演を通訳しました。あなたが日本への警告を繰り返す話すと軍国主義の人達は亡国の詩人が、とあざわらいました。」（高良・二九〇）

引き続き高良とみは「十九の娘は母となり、三人の娘の母となりました。そしていつの日か子供たちをタゴール先生の学園へ送りたいと心して育てました。戦いと敗戦と原爆は日本を暗黒につき落とし、末の娘は「春の雪」を遺して奪い去られ、次の娘は文学と詩の道をこころざし、上の娘はまだ見ぬインドを夢に描きあこがれのベンガールの風物を指し絵に描いてグルデブの百年祭に捧げてくれました。シャンティニケタンの日本庭園で楽団のシタールやビーナを奏で歌って私を見送って頂いてからあなたはジャスマンの花に埋もれて眠ってしまわれまして――戦いのさ中の昭和十六年八月七日。けれども神へのささげ歌「ギタンジャリ」は「生を愛するよう慰めてくれる不思議な力となっています。私の悲しみ極らない死の影の谷間をさまよっていた日にも原爆の町角の闇の中を歩いていたときもあなたの詩は遙かな空からの声のように私といっしょに生きて導いてくれました。」（中略）

グルデブ・タゴール―偉大な先生、今はインドへ行ってもシャンティニケタンにもあなたのお姿はありません。（中略）あの澄ましんだやさしいお声も。私の髪もすでに白くなりました。世は移り変わります。けれども永遠の詩人であるあなたの美しい詩がこれからの世代の人たちに読まれる日のあれかしと生誕百年に当ってこの本を訳しました。私どもの一生の道しるべの

星となつて今も光つづけるグルデブに心から感謝をこめてこの訳と絵を捧げます。」(高良・二九一―三)

高良とみはタゴールとの出逢い、そして『ギタンジャリ』を訳した目的についてこの本のあとがきに明確に描写しています。その文章は改めてタゴールの『ギタンジャリ』がいかに多くの日本人の心に共鳴したかを証明しています。しかし、当時彼の評価については勿論政治的な立場からの批判があつたことも事実です。

終わりに

『ギタンジャリ』の翻訳にあたって日本の翻訳者たちが感じたタゴールの愛、人間性、慰め、強さ、そしてそれを正しく翻訳するための努力、このすべてのがタゴールの『ギタンジャリ』が日本人に対して与えた衝撃の大きさを物語っています。最後に、タゴールの作品を通して強められてきた印日関係の絆の素晴らしさにも注目したいと思います。国家を超えて人々の心に居所 (make a place) を作れる詩人タゴールが世界の詩人として知られるようになった理由はそこにあると思います。

(ピッショ・バロテイ大学言語学部日文学科科長)